

介護老人保健施設しおさい

症例概要	ご利用者	: 80歳代・男性・要介護3
	利用期間	: 令和6年7月～ 訪問リハビリを利用中
	病名	: アルツハイマー型認知症(数年前から)
	既往歴	: 高血圧、糖尿病、ラクナ梗塞(詳細不明)
	経過	: 奥さんと二人暮らし。数年前から認知症状がみられ、令和6年6月頃から急激に動けなくなり要介護5の認定を受けた。訪問リハビリ利用をきっかけに、話す言葉や表情も増え、トイレに行けるようになった。約10ヶ月程で奥さんの運転する車に乗って週3回ドライブに出掛けるようになり、奥さんと共に楽しみの日々を取り戻され、要介護度も3へと改善となった症例。

内容

長年船乗りとして活躍されていたご本人は、引退後は奥さんとドライブや買い物を楽しんでいましたが、突然の体力低下でベッドから自力で起き上がることが難しくなり、歩行も不安定で転倒を繰り返すようになりました。入浴やトイレにも介助が必要となり、会話や意欲も低下していました。

連携室のリハビリ会議では、ご本人から「歩けない」「何をしたら良いかわからない」と不安の声が上がり、奥さんは「転ばずにトイレに行けるようになってほしい」という事でした。医師の励ましを受け、リハビリ職はご本人の身体状況を評価しつつ、ベッド上の起き上がりや車椅子への移乗練習を段階的に進めました。

訪問リハビリのため多職種が電話やサポートで連携し、奥さんにも介助方法を丁寧に指導。ご本人が「手すりに掴まると動きやすい」と感じたことに着目し、環境調整や声かけの工夫で意欲向上を図りました。トイレでのズボンの上げ下げも根気強く練習し、成功体験を積み自立度を高めました。夜間の呼びかけにも対応できるようになり、安心感が増しました。

半年後、玄関で靴の脱ぎ履き練習中に、ご本人は帽子をかぶり伝い歩きで奥さんの車に向かい、「これでドライブに行こう」と話すなど意欲が回復。自宅近くの海の見える場所で歩行練習を続け、潮風を感じながら「気持ちいいなあ。歩いてよかった」と笑顔を見せられました。

奥さんからは「私の運転する車でドライブに行った際、ずっと話していました」と嬉しい報告があり、翌週には「声掛けしなくても自分から動けていて驚いています」との声も聞かれました。ご本人もドライブの様子を楽しそうに語り、

その笑顔はまさにキラキラと輝いた生活を取り戻した瞬間でした。

多職種が連携し、リハビリ職がご本人に寄り添いながら丁寧に支援し、ご家族にも介助技術を共有したことで、意欲と生活機能が回復した好例であり、ご本人の「またドライブに行きたい」という強い願いと家族、職員の支えが原動力となった事例です。

【多職種の関わり】

【施設医師】 左半身の動作低下による転倒リスクについて指導。

【連携室】 医師の診察やリハビリ会議への参加支援。運転時の注意点アドバイス

【看護】 飲食量や服薬確認についてアドバイスを受け、リハ職経由で指導。

【介護】 リハパンとパットの装着方法の確認指導のアドバイスを受けた。

【栄養課】 糖尿病のためゼロシュガー活用や蛋白質摂取について電話相談でアドバイス。